

変わる日本の伝統文化

沖縄・島唄をめぐる現在

古謝美佐子、BEGINを事例に

沖縄ポピュラー音楽史

沖縄には琉球古典音楽、沖縄民謡、新民謡、沖縄フォーク、沖縄ロック、沖縄ポップ、沖縄ハードコアなど、さまざまな音楽ジャンルが生まれ発展してきた歴史がある。中でも、琉球王朝時代に確立された琉球古典音楽や村落共同体で伝承されてきた民謡は、いずれも三線さんしん（沖縄の三味線）の存在なくしては語れない。

沖縄音楽史の転換期はレコードやラジオなどのマスメディアが登場した一九二〇年代である。個人が作詞作曲した新民謡がレコード化されたプロセスを辿ると、そのほとんどが沖縄・日本・海外に住む沖縄系の人々に発信されていたことがわかる。しかし、一九七〇年代以降には、日本・海外の沖縄系以外の

沖縄県立芸術大学助手

高橋美樹

人々、つまり、沖縄外部の人々が抱く沖縄イメージを戦略的に導入した作品が発表される。沖縄フォークがその先駆けとなり、その後の沖縄ポップの台頭は一九八〇年代半ばのワールドミュージック・ブームと相俟って日本のポピュラー音楽界に一大ムーブメントを引き起こした。

本稿では、このようなポピュラー音楽界で活動してきた二組の歌手を紹介したい。両者とも沖縄出身であり、大衆から支持されている点は共通する。しかし、活動基盤としたジャンルや歌の発信先は異なり、個々の活動歴でも音楽的志向は変化をみせている。また、現在、両者の活動は「島唄」というジャンルで括られる傾向が強い。

そこで、本稿は異なる変遷を辿った歌手の事例を通して、「島唄」をめぐる沖縄の現在

をひも解いてみたい。

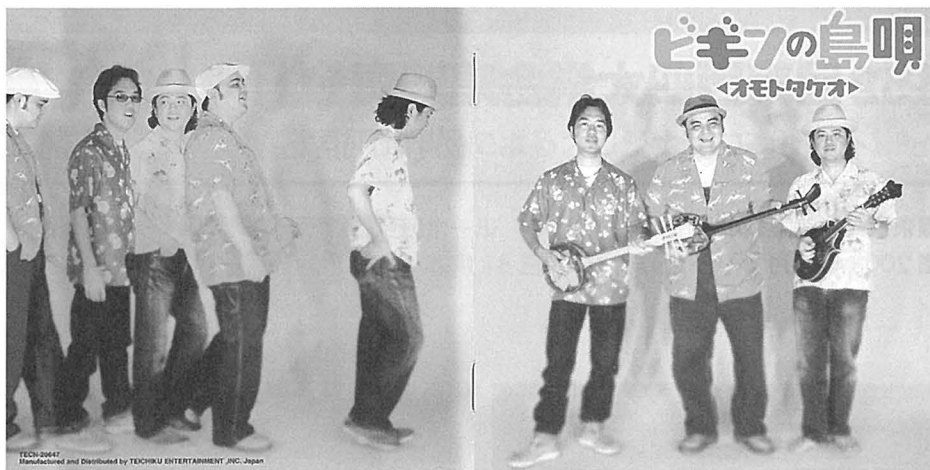
古謝美佐子こしゃみさこの民謡、沖縄ポップから島唄へ

沖縄を代表する歌手・古謝美佐子は一九五四年、沖縄県嘉手納町生まれの四十九歳。幼少時代から親戚の家にあった三線を隠れて弾くほど民謡が好きな少女は、九歳で民謡研究所に入門し、小学校四年の時、EP『すーしーさ』でレコードデビューを果たす。その後、民謡スナックに出演しながらレパトリーを増やし、一九八〇年代には知名定男ちみなさだおを初め多くの歌手と共演する。この時期の古謝の活動は主に沖縄県内に限定されたものであり、沖縄民謡界を基盤に歌手としての実績を積んでいたといえる。

しかし、一九八六年、坂本龍一のワールドツアーに参加したことが古謝の音楽世界を一変させる。坂本はアルバム『BEAUTY』（一九八九年）で沖縄民謡あま里屋（アンタ）〈ちんさぐの花〉を取り上げ、オキナワチャンズと名付けた沖縄の女性民謡歌手三人を起用した。その一人が古謝だったのである。

沖縄民謡は工工四くんくんしという三線の楽譜を使用し、古くは口承伝承を基本スタイルとして多くの歌を受け継いできた。

当然、古謝もそのスタイルを踏襲していた



BEGIN、CD『ビギンの島唄』、ティチク、TECN-20647、2000年

を契機に大ヒットし、一九九〇年に全国デビューしたことは記憶に新しい。また、地域行事を通して作品が大衆に浸透していくスタイルは民謡歌手・前川守賢が《遊び庭》で県民から絶大な支持を受けた例がある。

さらに、『オジー自慢のオリオンビール』エイサー・パージョンの試みは戦後、新民謡、沖縄ポップの作品がエイサー（沖縄の盆踊り）のレパートリーに導入することで作品が普及した例を学んでいる。

このように、BEGINは沖縄ポピュラー音楽史における聴衆獲得の成功法を巧みに活かし、J-POPの世界から舞い戻る形で、自らの「島唄」を沖縄の大衆に浸透させたのである。

島唄をめぐる現在

現在、出版・放送メディアを中心に沖縄民謡や沖縄ポップを「島唄」と総称する場合が多い。たとえば、フジTV「ザ・ルーツ オブミュージック3 島歌」（二〇〇二年九月二十六日放送）は沖縄民謡界の大御所・登川誠仁や知名定男、沖縄ポップのりんけんバンド、ネーネーズらと共に島唄のメロディーやリズムのルーツを追い求める内容であった。

また、二〇〇二年、奄美大島出身の元ちとせが《ワダツミの木》でオリコンチャート一位に輝いたことで、奄美の島唄にもメディアからの注目が一気に集まる。この現象を受けて、雑誌『ユリイカ』二〇〇二年八月号「特集 島うた」では奄美から沖縄までの民謡、ポップを取り上げた。

このようにメディアは時に強引に沖縄・奄美諸島の音楽を一括りにまとめ、その独自性や斬新さを強調する。しかし、本稿で二組の事例を挙げたように、個々が追究する音楽は常に揺れ動き、一つのジャンルでは括りきれない現象を抱えている。島唄、それは予測できない可能性を秘めた音楽なのである。

引用文献

- (1) 沖縄のエスニック・アイデンティティーをポピュラー音楽の様式において表現した音楽。久万田晋「九十年代沖縄ポップにおける民族性表現の諸相」『沖縄から芸術を考える』沖縄県立芸術大学大学院芸術文化科学研究科、一九九八年、一三四頁
- (2) 中澤岳洋「古謝美佐子 三線の音に高鳴る気持ちを、離れて気づいた沖縄の自分」『Free & Easy』二巻十号、イーストライツ、一九九九年、一二三頁
- (3) 「BEGIN 島人の宝」『うるま』五十六号、二〇〇二年、一二頁